

TOPICS

- ① 全学共通基礎教育科目「S-BASIC」について
- ② 数理・データサイエンス・AI教育部門の取り組みについて
- ③ 勉強かけこみ寺：実践心理学科における正課外教育

① 全学共通基礎教育科目「S-BASIC」について

前回のNewsletter 2024 Vol. 1の中で日野センター長からの就任の挨拶にもあったように、今年度高等教育研究開発センターでは、学生や教職員に対して、全学共通基礎教育科目「S-BASIC」の認知度を確認した上で、「S-BASIC」の目的や重要なポイントを全学的に周知することを目的とした取り組みを開始しました。

現在、「S-BASIC」に関する案内は本学のホームページに記載されており、イメージ図として「S-BASIC」科目は樹木（学生）が成長していくために必要な水の役割を担い、土壌を固め、そして、樹木が成長していく過程を「学び続ける力を育む」例として紹介しています。「S-BASIC」の可視化に向け、まず、本取り組みの構成員7名と共に、他大学の全学共通基礎教育科目のホームページでどのような図やイメージ図が使用されているのか調査しました。結果として、16大学の例が挙がり、複数の集合の関係や集合の範囲を視覚的に図式化したベン図や絵グラフ、学生の成長過程を視覚化した階段やトルネードのようなイメージ図が使用されていることが確認されました。その後、日野センター長と学長室職員と協議した結果、現在本学のホームページに記載されている樹木の図から大きく逸脱しない形で、「S-BASIC」を視覚的に分かりやすく示していくことに決定しました。

他大学の全学共通基礎教育科目の可視化例の調査と同時期に、日野センター長と学生参画スタッフと共に、1)「S-BASIC」に関する意見、2)現在の「S-BASIC」のホームページを見て感じること、3)「S-BASIC」科目に関する成功体験の主に3つの議題についてディスカッションを行いました。学生参画スタッフとのディスカッションを通して、まず、「S-BASIC」を全学的に周知するためには、大学側からの外的支援と学生自身の自主的な行動が必要であることが判明しました。学生参画スタッフによると「S-BASIC」に関して説明を受けていない学生が多く、1年次のガイダンスの多さや新生活等、様々な要因が「S-BASIC」の認知度の伸び悩みにつながっていると考えられます。特に1年次は、「S-BASIC」科目を必修科目として履修する必要もあり、「S-BASIC」でどのようなスキルが身につけられるのか気づかぬまま「S-BASIC」科目を履修していたようです。次に、現在の「S-BASIC」のホームページでは、学生が必要とする情報が記載されていない箇所があり、「S-BASIC」について学生が自主的に調べたとしても必要な情報を得られない可能性があることも分かりました。また、ホームページで使用されている色彩に関して、「福祉の淑徳だからこそ

(次ページへ続く)

① 全学共通基礎教育科目「S-BASIC」について

カラーユニバーサルデザインに配慮すべきである」、という指摘もありました。さらに、「S-BASIC」の中で印象的だった科目として、本学独自の「利他共生」や「チームワークとリーダーシップ」が挙がり、それらの科目での学びは専門科目や実習の際に応用できているとの回答がありました。また、「自己管理と社会規範」では、「専門外の科目だったものの興味深い内容で、思考力や社会力を身につけられる科目だった」と述べた学生もいました。「S-BASIC」の全学的な周知とともに、「S-BASIC」が学生生活でどのように活かされているのか振り返る機会も重要だと感じました。最後に、「S-BASIC」のホームページにある植物のイメージ図については肯定的な意見が多く、学生とのディスカッションのまとめとして、「自分自身を樹木に例えると、今のあなたは？」と題して絵を描いてもらいました（図1）。

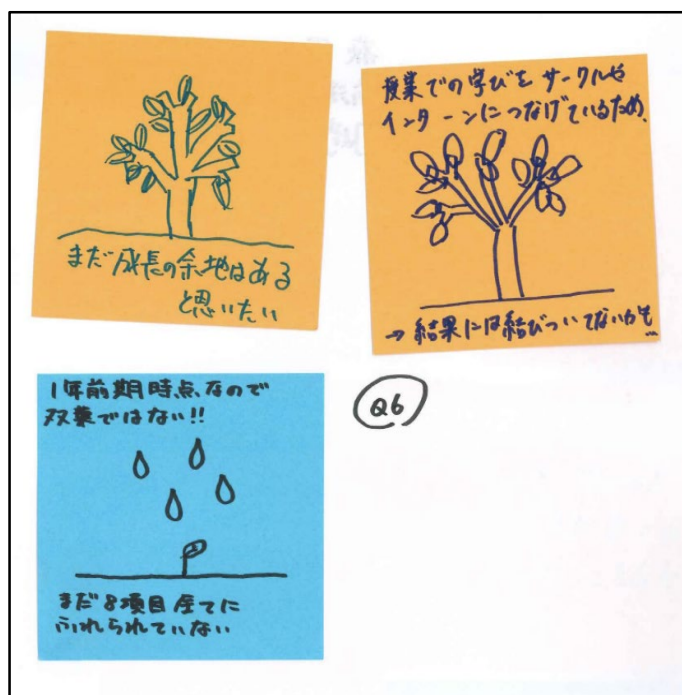


図1 「自分自身を樹木に例えると、今のあなたは？」

学生参画スタッフとのディスカッションの後、「S-BASIC」の目的や重要なポイントを全学的に周知することを目的とした資料の作成を開始しました。資料には、「S-BASIC」のホームページにある樹木のイメージを使い「S-BASIC」を通じた学びの過程を可視化し、「S-BASIC」で得られる力について記載しました。また、学生が「S-BASIC」科目を全て確認できるよう8つの学びと科目名の一覧を作成しました。さらに、「S-BASIC」の中で特色のある科目を6つ紹介し、「S-BASIC」の具体例を提示しました。今後、資料の初稿が完成次第、学生参画スタッフ及び構成員より意見をうかがい、最終稿の完成を目指します。

最後に、学生を樹木に例える比喻は実際に教育の場で多く使用されています。中でも、教育の世界的権威であるKen Robinson氏は「Teachers are like gardeners. (教員は庭師のようである)」と述べ、教育は製造業 (manufacturing) ではなく、生徒・学生の創造性を高めるために有機的 (organic) であるべきだと提唱しています。「S-BASIC」のような全学共通基礎教育科目は、学生が機械的に科目を履修するものだと捉えがちですが、大学生活を通して、教員は庭師として学生の成長を促進し、学生は樹木でありながら、また、生涯的に自己成長できるよう庭師としてのスキルを学ぶ機会であると考えます。学生自身が与えられる側から、自己主導的に成長することを学び、さらには与える側に発展していく過程を支援する学習環境としての「S-BASIC」が全学的に周知されることを願います。

(高等教育研究開発センター 今村有里 助教)

② 数理・データサイエンス・AI教育部門の取り組みについて

■ S-BASIC科目「統計分析法」の取り組みについて

数理・データサイエンス・AI教育部門の取り組みの一環として、2024年度から4キャンパス全てで開講された「統計分析法」（2年・前期配当）について報告いたします。

統計分析法は、全学共通の基礎教育科目（S-BASIC）における選択科目です。2024年度には全学で2年生を中心に300名を超える学生が受講しています。

この授業では、日常生活で広く利用されている統計資料を通じて、統計データの見方、データを効率的に整理・要約するための基本的な知識と技能、そしてBIツールTableau（タブロー）を活用した「データの可視化手法」を学習することを目的としています。

第1回から第6回までは、e-Stat（政府統計の総合窓口）やRESAS（地域経済分析システム）などのオープンデータを活用し、データの可視化や分析に取り組みました。また、Excelを使用した基本的な統計分析にも取り組みました。

第7回以降の授業では、BIツールTableau（タブロー）を使用した内容を展開しました。



VONDS市原をテーマとしたグループ課題に取り組む様子

BIはBusiness Intelligenceの略で、Tableauは大手企業や自治体などで採用されているデータ可視化ツールです。このツールは、プログラミングを一切使用せず、クリック操作のみで簡単にデータの視覚化を行い、洞察を得ることができるソフトウェアです。BIツールの活用はリテラシーレベルの要件にも入り、育成に向けた対応が求められています。

第7回から第11回では、Tableauの使い方を解説した動画を使用し、基礎的な操作方法を習得します。第12回からは、筆者が担当する千葉キャンパス及び千葉第二キャンパスのクラスでは、本学と連携しているサッカーチームVONDS市原FCの試合データやグッズの売上データを用いて分析を行いました。第13回からは、グループでディスカッションを交えながら分析し、その結果に基づいた施策を検討しました。

最終回の第15回では、分析結果と施策について各グループがプレゼンテーションを行いました。千葉第二キャンパスでは、VONDS市原FC 地域連携強化部の小石哲也様をお招きし、学生の発表に対してコメントをいただきました。小石様からは、実際のチーム運営の視点を交えた詳細なフィードバックや、サッカーやVONDS市原FCに関する基本的な説明もいただきました。千葉キャンパスでは、10チームがそれぞれ7~8分ずつの発表を行いました。学生からは「他の学生の発表を通してTableauの新たな視点を学べた」「プレゼンテーションの準備は大変だったが、やり遂げた充実感があった」などの感想がありました。

また、この統計分析法はS-BASIC科目として25クラスが開講され、6名の教員が担当しています。シラバスは共通ですが、授業の質を維持し、教員間でのばらつきを減らすためにGoogle Classroomを活用しました。具体的には、筆者が統計分析法の
(次ページへ続く)

② 数理・データサイエンス・AI教育部門の取り組みについて

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#3

③ 勉強かけこみ寺：実践心理学科における正課外教育

教員用クラスを作成し、そのクラスに担当教員や事務局（学長室）のメンバーを招待して、授業教材や課題をすべて共有しました。Google Classroomに慣れてくると、他の教員も授業に関するコメントや補助資料の共有を行うようになりました。

統計分析法は開講してまだ日が浅く、発展途上の科目です。現在、電子教科書の作成を進めており、この電子教科書では動画教材やリンクなどを有効活用する予定です。また、プロジェクト学習としての側面もさらに発展させていきたいと考えています。

今後も学生や教職員、さらには外部の皆様からのご意見をお待ちしております。そのうえで、より良い科目へと改善していきたいと考えています。

（高等教育研究開発センター 杉原亨 准教授）



VONDS市原FCをテーマとしたグループ課題に取り組む様子

「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」づくりを目指して、各大学には授業外学習の重点化が期待されています（中央教育審議会，2012）。主体的に考え、学び続ける力を身につけるために、大学での学習は授業のみならず予習－授業－復習のサイクルを通じて深めることが望ましいようです。しかし、大学生の学習実態は、必ずしも授業外学習に積極的とは言えません。国立教育政策研究所（2016）の調査によると、大学生のおよそ半数が予習・復習に1～5時間／週しか取り組んでいないとされています（これは専攻によらず共通のようです）。どうすれば学生の授業外学習は促されるのでしょうか。

授業外学習を行なっている学生になぜ授業外学習を行うのか尋ねた調査があります。その結果、「宿題が出た」や「期末試験対策」などの理由を押さえて、「授業内容を理解したい」が授業外学習の動機として最も高い頻度で報告されたそうです（吉田・戸川・金西，2011）。さらに文部科学省（2014）の調査では、平成24年度に国・公・私立大学、高等専門学校を中途退学した学生の14.5%が学業不振を理由としていたと報告されています。つまり、授業外であっても授業内容を学べる場を設けることは、大学生の授業外学習を促すのみならず、学業不振を防止し、結果として中途退学を防止するための手立ての一つにもなり得るといえます。

実践心理学科では、2022年度より退学防止プログラムの一環として、正課外講座「勉強かけこみ寺」を実施しています。勉強かけこみ寺では、実践心理学科の学生が講座の担当者に科目問わず授業内容を質問したり、その場で演習科目の作業を相談することが可能です。開講曜日・時間は限られているため、開講時間に授業を受けている一部の学生にとっては利用が難しい場合もありますが、勉強かけこみ寺が開講されるたびに利用して

（次ページへ続く）

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#3

③ 勉強かけこみ寺：実践心理学科における正課外教育

いるという学生の姿も見られます。2024年10月のある日、著者は勉強かけこみ寺へと足を運び、利用学生に「なぜ勉強かけこみ寺を利用するのか」を尋ねました。

学生A（2年生）：

“家に帰ると集中できないため、できるだけ大学で勉強を完結させられたらと考えています。私の中で勉強かけこみ寺は集中して学習する場となっているため、来られる時は毎回利用するようにしています。”

学生B（2年生）：

“授業の入っていない空きコマを利用して事前・事後学習ができれば効率的だなと考えていました。授業がない時に勉強かけこみ寺が開いていれば、わからないところを担当の先生に聞きながら学習・作業できるので有効な場所だと感じています。”

このように利用学生の声から、勉強かけこみ寺が授業外学習を促す場として機能していることが、利用学生には高い満足感を感じてもらえていることがわかりました。また、勉強かけこみ寺について認知はしていたものの、それまで利用したことのない別の学生からは次のような声も聞かれました。

学生C（2年生）：

“実際に利用してみると学習に集中しやすい環境だと思いました。勉強かけこみ寺を知った時は、利用する学生はどのくらいいるのだろうと疑問に思いましたが、実際に利用してみると今後も利用したいと感じられるものでした。”

学生Aや学生Bと同様に、学生Cも勉強かけこみ寺には満足しているようでした。こうしたことから、勉強かけこみ寺は授業外学習を促す重要な役割を果たしているといえそうです。しかし、「利用する学生はいるのか」という疑問ももっていたようです。勉強かけこみ寺をご担当いただいている先生の中にも同様の指摘をされた先生もいました。

担当者A：

“授業の予習・復習をする学生や授業の中だけでは理解が及ばなかったことを質問に来る学生が多いです。その多くは、より専門的・発展的な内容について学びたいと思っている学習意欲の高い学生です。学習意欲の比較的高くない学生は、勉強かけこみ寺を自分が利用すべき場所としては認知していない可能性があります。”

担当者B：

“学生には、「本当に困った時にだけ行くもの」という認識が広まっているように思います。それが、本来の開講目的とは違って、ある種の「敷居の高さ」となってしまい、学生の気軽な利用を妨げている可能性があるかもしれません。”

「勉強かけこみ寺」という通称は、「学生が困った時に着の身着のままでも逃げ込める場所」という理念の下に名づけられました（小森・高田・三村・大野，2023）。しかし、気軽に「かけこむ」ことができる場所としての認識が、学生の間には十分広まっていないようです。むしろ、「学習に深刻な困難を抱える学生や高い学習意欲をもった学生など限定された学生のみが参加するもの」という誤解を招いている可能性さえあります。こうした実態について、勉強かけこみ寺の取りまとめを担当されている三村千春先生に、講座の今後の展望について意見を伺いました。



インタビュー当日の勉強かけこみ寺の様子

(次ページへ続く)

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#3

③ 勉強かけこみ寺：実践心理学科における正課外教育

三村千春先生：

本講座は、学習上の難しさや困難感を誰にも相談できずに抱えた結果、休学や退学に至ってしまう学生への支援の一貫として開講された経緯があります。学習上の困難感を抱くタイミングやその程度は人それぞれですが、特にグループワーク形式の講義や統計法、実験法などの授業が始まる中で、これまでの学習方法では対応できず、ついていけなくなってしまふケースが多いようです。

本講座の開講から3年目となり、多くの学生は本講座の存在を認識しているようなので、今後は実際に利用を促すような広報や声かけを行っていきたいと考えています。一方で、あまりに大勢の学生が出席してしまうと、困り感の高い学生に支援が行き届かなくなってしまう可能性がある、という難しさがあります。今年度からは、学修支援室や学生相談室とも連携を行い、よりニーズの高い学生に利用してもらえよう、工夫を行っています。

前述の通り、勉強かけこみ寺は、一度でも利用したことのある学生にとっては授業外学習を集中して行うための有効な場になっているようです。しかし、利用する学生には偏りがあり、より幅広い学生の利用を促す工夫が必要となります。これまで、勉強かけこみ寺については、実践心理学科の教員が自らの授業の中で学生に周知してきました。今後、「些細な質問でも、ものの5分だけの参加でも、自分の望むように気軽に利用してよい」と伝えていくことに

より、本当の意味での「かけこみ寺」が完成していくのではないかと期待されます。

インタビューにお答えいただいた先生、学生のみなさまには、この場を借りて御礼申し上げます。

(総合福祉学部実践心理学科 玉井颯一 助教)

引用文献

中央教育審議会 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ— (答申)

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/c_hukyo/chukyo0/toushin/1325047.html)

古曳 牧人・川邊 譲・岩熊 史朗・高岸 百合子 (2017). 心理学部における中途退学の要因の検討 駿河台大学論叢, 58, 59-67.

国立教育研究所 (2016). 大学生の学習実態に関する調査研究について (概要)

(https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf06/160330_gaiyou.pdf)

小森 めぐみ・高田 圭二・三村 千春・大野 俊一郎 (2023). 実践心理学科における大学中退防止プログラムの試み—勉強かけこみ寺活動報告— 祝と行く大学高等教育研究開発センター年報, 10, 135-139.

文部科学省 (2014). 学生の中途退学や休学等の状況について

(https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf)

吉田 博・戸川 聡・金西 計英 (2011). 大学の授業における学生が授業外学習を行う要因 日本教育工学会論文誌, 35, 153-156.

(<https://doi.org/10.15077/jjet.KJ00007904736>)

高等研センター年報の近況について



「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第11号 (2024年度)」について、多くの原稿をご応募いただきました。誠にありがとうございます。

現在、年報第11号の発刊に向けて校正作業を進めております。今しばらくお待ちいただくと幸いです。

淑徳大学 高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2024 第2号

発行日：2024年11月20日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター

TEL：03-5918-8948 FAX：03-3966-7631

E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp